

“研究者”から
“若手研究者”へ。

Impression & Advice

「グローバルCOEリエゾンラボ若手研究発表会」の参加者からの一言をお届けします。



もっと積極的に質問を！
質問力は、研究能力につながっています。



Scientist
持田 悟
Satoru Mochida
大学院先端機構
特任助教

工夫すること。質問すること。

若手研究者が各自の研究内容を短い時間でまとめ、英語で発表を行った今回の研究発表会。感心するほど上手な人もいれば、もうちょっと練習が必要かなと感じる発表もありました。そのような差はさておき、いいなと思ったのは研究の目的や背景が聴衆に合わせて明確に示され、かつプレゼンが自分の力量に合わせて作り込まれている発表であったということです。そのようなプレゼンができた人は、発表後にこれまで話したことのなかった人にほめられたり、質問を受けたのではないのでしょうか。今回のように発表の機会を得たら、聴衆に自分の研究に興味を持ってもらえるよう、さまざまな工夫を凝らしましょう。

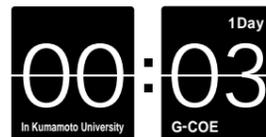
一方、聴衆としての若手参加者には「もっと積極的に質問を！」と思いました。単純な質問でもかまいません。英語に自信がなかったら、ノートに質問を書き留めておき、後で発表者をつかまえて聞いてもいいでしょう。質問をする能力というのは、研究能力にも直結しています。

国際プレゼンテーションへの道のり

研究発表会は、発表者の所属が11分野にもわたることから、発表内容が疾患、器官発生（腎臓、膵臓、血液、神経、そのほか）、エビジェネティクス、幹細胞、睡眠、生命倫理などと、大変多彩でした。発生医学研究をさまざまな局面から理解する、熱心な試みを感じられました。会場は毎回立ち見が出るほど多くの聴衆を迎え、誠に盛況でした。

発表、討論、座長は全て英語で行われ、発表者には10～15分の短い時間で自分の研究を説明し質問に的確に答える、というミッションが与えられました。研究をより深く理解すると共に、国際的なコミュニケーション能力を磨くための、ある種、道場のような場でもあったのではないかと思います。多くの興味深い研究発表を拝聴させていただき、ありがとうございました。

Scientists
齊藤 典子
Noriko Saitoh
細胞医学分野
助教



研究者たちの一日

毎日、最先端の研究に取り組む、熊本大学グローバルCOEの研究者たち。コツコツとした日々の積み重ねが、大きな研究へとつながっています。そんな彼らは、どんな思いで研究を行っているのか、研究者の一日をのぞいてみましょう。



腎臓発生分野
G-COEリサーチ・アソシエイト
寺林健
Takeshi Terabayashi

2007年3月に東京大学大学院医学系研究科で学位を取得し、大阪大学蛋白質研究所を経て、2009年4月よりグローバルCOEリサーチ・アソシエイトとして着任しました。東京生まれの自分は、熊本の自然の美しさに目を奪われてばかりです。空の色、雲の形、山の端、一つひとつがくっきりと、一年を通じていろんな姿を見せてくれます。

“研究成果はその人の能力と研究に費やした時間に比例する”

これは博士課程のころにお世話になった恩師の言葉です。成果を残していくには、自分を磨き、しっかりと研究に取り組むようにと薫陶を受けました。天才ならいざ知らず、自分のような凡人は時間をかけなければ結果は得られません。かといって、研究は世界中の見えない相手との果てしない競争。時間をかければかけるほど、ライバルたちはどんどん先に進んでいってしまいます。ライバルたちに勝つには、こちらも実験を進めるより他はなく……、そういう訳で日夜研究に動んでいます。自分には人に語れるような大きな野望はありませんが、自分の行った研究がいつか何かの役に立ってくればと思っています。そのために自分の研究の足跡をしっかりと残すべく、『実践躬行』の言葉を掲げています。とはいえ、最近では少しずつではありますが、自分の時間も作るようになっています。研究と人生の両方を楽しめる、そんな研究者になれればと思っています。



電流を流して、タンパク質を分離させる



設備が整った環境で日々研究！



週イチペースで通っている
韓国料理店「ケナリ」のオモニコ

